

---

**流星のロックマン4 beast ビヨンドアート編**

みソラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流星のロククマン4 beast ビヨングート編

### 【Nコード】

N9459U

### 【作者名】

みソラ

### 【あらすじ】

主人公の名前は星川スバル。

この世界ではネット社会からさらに200年経って、電波へと進化した世界だ。

この世界でも電波をつかって様々な事件が起こったりする。

そんななか、スバルの父親は宇宙パイロットで他の惑星とブラザーバンドと呼ばれるアイコンタクトをしようとしたが宇宙人に襲撃され、そのまま行方不明に。

そのことがきっかけで、スバルはひきこもりになってしまう。

しかし、スバルはある日FM星人となる電波体、ウォーロックと出会う。

その電波体ウォーロックのおかげで少しずつあかるくなっていき、電波世界のヒーローロックマンに電波変換して、これまで3度世界を救ってきた。

今回の話はスバルが小学校6年生に進級して平穏な毎日を送っていたのだが、なにやら不穏な影が再びスバルに迫っているようだった…。

\*注意

このお話は流星のロックマンを知らないと読みづらい可能性があります。

あらかじめご了承ください。

朝だね（前書き）

前の小説消されてしまった…。

## 朝だね

こんにちは、僕の名前は星川スバル！

僕はロックに出会ってから色々なことがあったんだ。

初めて会った時はほんとにびっくりしたな。

それから、僕はロックの力を借りて電波変換をしてロックマンとして3度大きな戦いをした。

あれから、一年経って僕は6年生に進級する。

今はロックマンになって戦うことは少ない。

それだけ世界が平和になったってことだね。

『おい！スバル！そろそろ家を出ないと遅刻するぞ！』

「待つてよ！せっかく思い出の回想をしていたところなのに…」

今、話しかけてきたのが僕のウィザードで最高のパートナーウオー  
ロック。

僕は親しみを込めてロックって愛称で呼んでるんだ。

「スバルー！そろそろ学校の時間じゃないのー？」

「わかってるよ。じゃあ、母さん行ってきます。」

「はい。気をつけてねー。」

僕は結構時間に余裕がないため走っていたんだけど、これから始業式なのに、僕の目の前にいるのは…。

『メッソー！』

『スバル！スバルー！ウィルスだ！戦いだ！』

「落ち着いて…。もう遅刻ぎりぎりなんだけど…」

『ソッコで倒して、そのままウェーブロードを通っていけば間に合うだろ。』

「最近戦ってなかったから大丈夫かな…？」

『地球を救ったやつがなに情けないこと言ってるんだよ、スバル！』

まったくロックは…。

僕もどうしてこんなにタイミングが悪いんだろう？

まあ、どっちにしる困っている人もいるんだし早く倒して学校に行かないと。

「いくよ！トランスコード！シューティングスターロックマン！」

『かなりの数だな。これはほねが鳴るぜ！』

「ほねじゃなくて腕ね。時間がないんだから急ぐよ！バトルカード！エアスプレット！マッドバルカン！」

なるべく、少しの攻撃・時間でたくさん倒したいから僕は広範囲で攻撃できるエアスプレットと手数があるマッドバルカンをプレテーションした。

これで、ある程度はデリートしたけど。まだ軽く20体ぐらいいるな…。

さっきの戦闘である程度発生してるし、あれでいいっつ。

「あれやるよ、ロックー！」

『お！久しぶりにあれか？よしいいぜ！』

「ファイナライズ！ブラックエース！」

ファイナライズとはこの世界で以上に発達した電波社会における副産物であるノイズを力に変えた変身だ。

以前までは流星サーバーと呼ばれるメテオGからフォルダを共有することができたのだが今はないため使用することはできない。

それでも、このファイナライズの必殺技…

NFB《ノイズフォースビックバン》ならこのウィルスを一発でいけるはず。

「くられ！ブラックエンド…ギャラクシー！」



## 謎の人型ウィザード

「なんとか間に合ったね！」

『これで間に合ってなかったらお前毎回地球が滅びてるぞ。』

「縁起が悪いこと言わないでよ！」

結局あの後ブラックエンドキャラクターで敵を一掃した後も何体か出くわしてほんとに遅刻ぎりぎり。

これからは毎日少しずつ電波ウィルスをデリートしていこうと思う。

なにはともあれ始業式…そして入学式！

新一年生がたくさん入場してきた。

やっぱりまだ幼稚園からあがってきたばかりであんまり落ち着きがない。

それでもこれからみんな大人の階段を上っていくんだなと少し大人目線で考えてみた。

「それではこれから生徒会長挨拶。白金《しろがね》ルナさんお願いします。」

「はい！」

今、呼ばれたこのドリルみたいな頭をしている女の子は白金ルナ。  
みんなからは委員長と呼ばれている。

生徒会長になったから生徒会長と呼ぶべきなのだろうけど…本人は  
このままでいいというので言い慣れた委員長でみんな呼んでいる。

「ゴン太君！ゴン太君！委員長が挨拶しますよ！起きてください！」

「もう牛井は食べられねえよ…zzz」

「まったくゴン太相変わらず牛井のことばかりだね。」

『だな！』

寝ていて、牛井などの食べ物に目がないこの体格のいいのは牛島《  
うしじま》ゴン太。

そして、それを起こそうとしていた眼鏡のかけているは最小院《さ  
いしょういん》キザマロ。

委員長とは昔から一緒にいたらしくいまではすっかり付き人てき存  
在になっているこの二人。

まあ…僕も人のこと言えないけど。

かくして、無事(?) 始業式&入学式を終え、クラスに向かってい

る。

ちなみに去年とクラスメイトと担任の育田《いくた》先生は替わらないんだ。

SHRも終わり下校の時間。

さすが始業式だ！あつという間に放課後。

いつもこんな感じだといいいんだけど…。別に授業がつまらないとは思ってないけどね。

「さあ！帰りましょう、スバル君。」

「わかった、委員長！」

「キザマロもゴン太も急いで！」

「わかってますよお！」

「待ってくれー！委員長！」

僕達はいつも一緒に下校している。

普段なら登校も一緒だ。ただ、今日は生徒会の仕事で委員長たちは先に行ってたから一緒にいかなかったんだ。

「ねえ？何かしら、あれ！」

僕は委員長の指差す方向を見た。  
そこには…。

「子供？」

僕はゆっくり近付いてそっと起こしてみた。  
すると、確かに子供のようだったが…。

『おい！スバル！こいつから電波生命体の反応があるぞ！』

「え？！つてことはこの子供…。人間じゃないの?!」

『う…う…ん…。あれ？こ…こはど…ど…』

「ねえ？君は一体…?」

『トリルだよ。そっか！こ…こはロックマンや熱斗達がいた世界だ  
〜!』

「ロックマン?!」

『うん！君もなんだかロックマンと同じ感じがするね！どうして?』

「えーと…。」

『おい、スバル！こいつ一回ヨイリーのバアさんにみせたほうがいいんじゃないか?』

「そうだね。ごめんみんな！そういうことだから先に帰ってて！トランスコード！シューティングスターロックマン！」

僕はこのトリルと名乗る電波生命体をつれてWAXAに移動した。

## シンクロナイザー

「よっと！やっとなついたみたいだ。」

『わあ〜！やっぱりロックマンだー！久しぶり、ロックマン！』

「えーと……。多分人違いだよ。とりあえずついてきて。」

僕達の中に入ってヨイリー博士の所に向かった。  
途中である人に呼び止められた。

「おお！スバルじゃないか！」

今話しかけてきたのは暁 シドウさん。  
過去はディーラーという悪の組織にいたみたいんだけど、今はW  
AXSAのエースとして働いている。

「暁さん！もう身体のほうは大丈夫なんですか？」

「ああ！まあこの通りにな！学校の方はうまくいってるか？」

「それなりです。」

暁さんは数ヶ月前のディーラーとの戦いで、大けがをしていたが奇跡的に助かって元の生活にもどっているらしい。

僕は暁さんにヨイリー博士の居場所を教えてもらい先を急いだ。

「ヨイリー博士！」

「あら、スバルちゃん！久しぶり！元気にしてた？」

このヨイリー博士と呼ばれるこの人はこのWAXSAの技術開発の責任者いわばリーダーだ。

この人は過去にデータとなってしまうた委員長を元の人間に戻してくれた恩人でもある。

「はい！それより博士！見せたいものがあるんです。」

僕はそういつてトリルと名乗る電波体を博士にみせた。

「ほう…これは興味深いわね…。少しおとなしくしててね。」

『それよりロックマンは?』

「はい!もういいわよ!スバルちゃん、少し相手してあげてちょうだい。」

はやっ!もう解析終わったのか!  
さすがヨイリー博士…。

『ねえ、ロックマンは?』

『ロックマンは俺たちだ!』

『うん…。似てるけどどこがちがう気がする。』

「それは多分ここがあなたがいつているロックマンがいた世界から200年経っているせいだと思っわよ。」

ヨイリー博士もう調べ終わったのか?  
いくらなんでもはやすぎるんじゃない?  
でも、博士なら可能なのか?なんていつたって電波化した人間を元に戻すことができるほどなんだから…。



『もうそんなに時間が経っちゃってたんだ…。ってことは熱斗とかはもういないの?』

「残念ながら光博士はもう亡くなっているわ。それにロックマンE XEもいまこうして電波で暮らしていけるこの世界を作るための礎となってしまうたからいわ。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9459u/>

---

流星のロックマン4 beast ビヨンドアート編

2011年11月2日03時25分発行